

大石敏広(北里大学)

外的世界に関する懐疑論として、「培養槽の中の脳」という仮説による論証がある。「培養槽の中の脳」とは、私たちは実は、身体から切り離され、神経の末端がコンピュータに接続され、様々な経験を持つように設定され、すべてが平常通りだという幻想を持たされている脳であるという仮説である。この仮説を利用して次のような論証が提示される。

- (1) 私は、自分が培養槽の中の脳ではないことを知らない。
- (2) もし私が、自分が培養槽の中の脳ではないことを知らなければ、自分に手があることを私は知らない。
よって
- (3) 私は、自分に手があることを知らない。

この懐疑論的論証に対する反論として、文脈主義という有力な主張がある。本発表では2つの文脈主義的見解を取り上げる。まず、キース・デローズやスチュワート・コーエンたちの文脈主義は、「知る」ということが満たすべき基準(認識基準)の高低を導入して懐疑論を回避しようとする。懐疑論的仮説が登場する哲学的文脈においては認識基準が高くなる。高い認識基準においては、「私は、自分に手があることを知らない」という文は真である。一方、私たちの日常的な文脈においては哲学的文脈におけるほど認識基準は高くはなく、「私は、自分に手があることを知らない」という文は偽であり、「私は、自分に手があることを知っている」という文が真である。この場合、発話の文脈が違うのであるから、「私は、自分に手があることを知らない」という文と、「私は、自分に手があることを知っている」という文は矛盾しない。つまり、同じ文でも文脈により、真になったり偽になったりするものであり、真偽は文脈に依存する。こうして、デローズたちの文脈主義によれば、私たちの日常的な文脈では、「私は、自分に手があることを知らない」という懐疑論的結論は無害であるということになる。

デローズたちの文脈主義は、外的世界に関する懐疑論を回避するため、真理を発話の文脈に依存的なものとして理解する。「真理の文脈依存性」がこの文脈主義の根幹をなす。しかし、デローズたちの文脈主義の最大の問題点はまさに、この「真理の文脈依存性」という考え方にある。「真理の文脈依存性」という考え方が妥当かどうか、デローズたちの文脈主義が妥当かどうかを左右する。

一方、マイケル・ウィリアムズは、デローズたちの文脈主義を「単純な会話的文脈主義」、自分の文脈主義を「主題文脈主義」と呼んで、2つの文脈主義の違いを次のように説明している。「単純な会話的文脈主義」において認識基準は、それぞれの会話の文脈において固定され、会話の主題とは独立して認識基準の厳格さの尺度が存在する。これに対して、「主題文脈主義」では認識基準は、それぞれの会話の主題から影響を受ける。「単純な会話的文脈主義」によれば、懐疑論は、日常における認識基準を離れて、知識のための基準を上げている。これは、懐疑論は限定的に正しいと認めることであり、認識論的考察から知識の不可能性が帰結するこ

とを認めることである。しかし、こうした戦略は懐疑論に対してひどく譲歩的であり、最終的には、日常における認識基準によっても認識は不可能であるという懐疑論的主張を受け入れることにつながる。これに対して、「主題文脈主義」では、会話の進展によって認識基準の高低の変化が生じるのは、一定の主題の文脈においてのみである。つまり、懐疑論が日常における認識基準から離脱するのは、主題の文脈を変えることによってである。学問的探究には、その探究に特有の主題を設定する一般的な諸前提が存在している。ウィリアムズはこの諸前提を、「方法論的必然性(methodological necessities)」と呼んでいる。懐疑論の主題は、日常的知識ではなく、知識それ自体であり、知識それ自体の探究の文脈は豊富な理論的前提を有している。

ウィリアムズによれば、伝統的な知識の基礎付け主義は、その「方法論的必然性」として、認識論的探究の対象として固定的なものが存在するという「認識論的実在論」を前提としている。「認識論的実在論」は、外的世界に関する知識よりも感覚的経験による知識が優先するという「認識論的優先性」を特徴とする。この「認識論的実在論」に基づいて基礎付け主義は、認識とは責任ある振舞いによって得られるものであり、根拠がないにもかかわらず命題を真と信じることは無責任であり、ある命題を信じるのが正当であるためには、その命題を真とするための根拠としての証拠を所有していなければならないという「先行する根拠付け要求(Prior Grounding Requirement)」を主張する。懐疑論は、この「認識論的優先性」と「先行する根拠付け要求」を「方法論的必然性」として前提としながら、その前提に基づく論証が知識の正当化に失敗していると考え、知識に対する懐疑を提示する。

これに対してウィリアムズは、文脈主義の立場から、知識主張の正当性に対する適切な異議申し立てがない場合は、知識主張はデフォルトで保証されているが、そうした異議申し立てがある場合には、それに対する弁明が必要であるという「デフォルトと異議申し立て構造(Default and Challenge structure)」の理論を対置する。ウィリアムズは、「デフォルトと異議申し立て構造」の理論は私たちの日常における認識の実践に合致するより良い理論であり、懐疑論の理論的前提を受け入れるべき理由はないのであるから、懐疑論の理論的前提を避けることによって懐疑論を回避できると考える。

本発表では、以上の2つの文脈主義が懐疑論をうまく回避できているかどうかという問題について次の手順で論じていく。第一に、デローズたちの文脈主義の擁護論においてしばしば用いられる「平らな」の例や銀行の例を、私たちの日常における「知る」や「知識」といった言葉の使用に基づいて吟味し、デローズたちの文脈主義の根幹をなす主張である「真理の文脈依存性」を批判する。第二に、ウィリアムズの文脈主義における懐疑論批判について考察し、ウィリアムズの議論がはらむ不整合性を明確にする。第三に、「認識論的優先性」を前提とする理論として懐疑論を解釈するウィリアムズに対して、それとは別の懐疑論解釈を提示する。第四に、私たちの日常における「真理」という言葉の使用に着目し、その視点から、ウィリアムズの解釈による懐疑論とは別に提示した懐疑論の可能性を示す。その際に、真理に関するウィトゲンシュタインの記述と、客観性や実在論に関するトマス・ネーゲルの主張に言及する。